

周保松・倉田徹・石井知章著

香港雨傘運動と市民的不服従

——「一国二制度」のゆくえ

〈社会評論社、二〇一九年一月、三三四頁〉

二〇二〇年六月三〇日、「香港国家安全維持法」が施行され、五〇年間不変を国際的に約束されていた「一国二制度」は死んだ。翌七月一日、これに抗議する人々を警官隊が暴力的に制圧し、三七〇人が逮捕された。「国境」の向こうの深圳では、中国の「武警」が威嚇するように駐屯していた。

思い返せば一九九七年七月一日、「香港返還」など報道は祝賀基調であった。しかし、「一国二制度」なるものが、名実ともに約束通りの期間維持されるのか、筆者自身全く確信が持てなかった。それゆえ、「植民地の時代の終焉」に祝杯を挙げる気には、全くなれなかった。

すでに一九八九年、民主化要求に銃口を向けた「六四」事件によって、中

国共産党は一党独裁を何としても死守すると内外に宣言していた。けれども、「六四」の鮮血は遠く東欧へ飛び、一党独裁の「社会主義国」が次々と崩壊していった。一党独裁の本家「ソ連邦」も、一九九一年末、消滅した。一方、「社会主義市場経済」中国は、諸外国の支援と協力とで「発展」し、「韬光養晦」から「大国崛起」へと舵を切り、いまや「一带一路」を掲げつつ覇権主義の様相さえ呈し始めている。

こうしたなか、二〇一四年秋、のべ七九日間にわたり香港中心部で展開されたのが「雨傘運動」であった。「警官のペツパー・スプレーや催涙弾による攻撃」に対する雨傘が「海のように繋がっている風景」（二五頁）からついた名称である。その本質は「市民的不服従」にあった。本書は、運動に深く関わった周保松（香港中文大学副教授）の講演と倉田徹（立教大学教授）のコメントを中心に多くの写真、石井知章（明治大学教授）の解説などをお

さめている。

当事者周保松の言を紹介しておく。「雨傘運動は……最終的にいかなる実質的かつ目に見える政治的成果も得られなかった」（一〇一頁）が、民主化運動であり「世界における市民的不服従の歴史にきわめて重要な事例を残し」、さらに「雨傘運動が香港人の主体意識と共同体意識を根本的に変えた」がゆえに、「雨傘運動はまだ終わっていない」（二〇二—二〇五頁）。

反対運動が国際的注目を浴びる中、北京で「香港国家安全維持法」が制定された。中国はそれを「法治」といい、中国外にあつても、外国人であつても反中国的言動や思想が取締の対象になる（同法第三八条）。

中国は「和平演変」による社会主義支配の倒壊を恐れつつ、台湾の吸収合併を目論んでいる。「一国二制度」の実態が明らかになった以上、「今日の香港は明日の台湾」という声がきかれるのは当然であろう。（三好章）